The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	沈従文の選択 : 沈従文の民国時期の作品における政治性及び文学観
Author(s)	楊, 霊琳
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/34543
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　楊　霊琳　　）	
論文題名	沈従文の選択 ――沈従文の民国時期の作品における政治性及び文学観

論文内容の要旨

本論文は、中国の中華民国時期において、沈従文が軍人、売春婦・童養媳、苗族という三集団を題材に書いた小説作品を切り口として、沈従文文学における政治性、及び彼が選択した新文学創作の道が如何なるものであったのかを論じた。

論文は、「序章　沈従文の生涯及びその評価」、「第一章　沈従文の作品における軍人」、「第二章　沈従文の作品における女性の解放問題――売春婦、童養媳を中心に」、「第三章　「夢」と「現実」――沈従文の苗族に関する作品」、「第四章　沈従文の文学観」、「終章　真実という選択」の六部分によって構成されている。

序章では沈従文の経歴をとりあげ、彼が兵士、苗族、湘西人という複雑な社会的立場にあったことを明確化した。第一章では、沈従文の軍人に関する作品を扱った。これらの作品に描かれた軍人は、ほぼ湘西現地の軍人をモデルとしている。これら軍人を描いた作品は、先行研究においては、湘西のエキゾチシズムを描く作品として評価されるのが通例で、軍人だけを取り立てて論じるものは少ない。本章は、このようなエキゾチシズムの視点を避け、軍人の登場する作品を一つのカテゴリーとして、民国時期という大きな時代背景に置いて論じた。沈従文の1924年－1929年におけるこれらの作品、及び『湖南的西北角』（1947）などの歴史資料を検討することによって、軍人が民国時期において差別の対象となる集団であったこと、沈従文が軍人の善良で単純な一面と非人間的な生活の両方を描くことによって、他の人々に軍人を理解してもらい、軍人に対する差別を取り除くことを望んでいる、ということが明らかになった。ここから、沈従文は文学の社会効用性を活かして、軍人への差別意識の排除、軍・民平等、互いの尊重、「愛」に溢れる社会構造という理想をしめしたのであり、それこそが沈従文作品における政治性である、と結論づけた。

第二章では、沈従文が湘西女性をモデルにして書いた売春婦、童養媳、寡婦に関する作品を扱った。先行研究では、これらの作品は、ほぼ大胆に愛情を追求する湘西の女性を描いたので、湘西の原始文明の特色であり、外部の都会的文明への中堅抵抗勢力の代表である、と論じられるのが通例である。しかし、本論では、民国時期に盛んであった女性解放問題という視点を切り口として、沈従文の女性解放問題に対する主張に検討を加えた。当時の社会における様々な女性解放論を整理し、沈従文の論と比較検討した結果、左翼革命への参加と職場への進出による救済、当時盛んであった女性教育といった道を盲目的に選択するのを、沈従文が回避したことが明らかになった。沈従文はその代わりに、周作人と極めてよく似た道を選択した。彼は、周作人と同様に性的解放を女性解放の首位に置いた。また、作中で売春婦らに男女平等の恋愛観を持たせることによって、売春婦に限らず、全ての女性が男性の性欲の対象ではな

く、平等と尊敬を得るべき存在であることを指摘した。その一方、童養媳蕭蕭の物語がハッピーエンドに終わっているのは、沈従文が当時の女性に禁欲を強いる道徳観を批判する同時に、女性がどうすれば徹底的に性的に解放されるのかについて、自分の主張を表現した結果である、と論じた。

第三章では、沈従文の苗族に関する作品を扱い、「現実」と「夢」という仕掛けを通して、その二つが社会の欠陥を浮き彫りにするための視点であったいう結論を得た。「現実」と「夢」の対比によって苗族の受けてきた他民族からの差別や不平等が明らかとなり、「夢」という「現実」を改善するためのモデルは、全ての民族間の差別の撤廃を求める沈従文の理想的社会像なのであった。彼は作中で苗族出身を認めて彼らの代弁者という立場を表明し、自身の影響力を生かして、苗族の素晴らしさと彼らに対する非人間的待遇を明らかにし、苗族のような少数民族に対する差別の撤廃と、理想的な社会の再構築を訴えたのである。

第四章では、沈従文の新文学の創作方法に関する主張を論じた。沈従文を文学思想が混乱を呈した20年代—30年代という社会背景に置いて検討することによって、彼が30年代の主流であった左翼文学思潮に従わず、周作人が文学革命初期に提出した新文学に関する主張を選択した、ということを明らかにした。この二人の関連性について、具体的に論じた先行研究はあまりなく、符家欽の『沈従文故事』の中で、沈従文が早期周作人を模倣した、というような一言だけがある。また、任葆華が沈従文の初期の作品「鴨子」（1926）の冒頭で「擬狂言」と書いていることから、彼は周作人が翻訳した『狂言選』から一定の影響を受けた、というような論述にとどまっている。それを除けば、孫歌、小島久代の二人だけが沈従文の40年代の評論文を巡って、沈従文と周作人の関連性をより具体的に論じた。しかし、この二篇の論文はそれでもまだ抽象的である。周作人と沈従文の主張を明確、系統的に解説してないし、沈従文の小説などほかのジャンルの作品が周作人の主張を継承したかどうかについても論じていない。従って本論文では、沈従文と周作人の文学観の比較整理を行った。そうすることによって、沈従文が周作人の「人的文学」という五四時期の文学観の中心概念を選択したということが明らかになった。また、彼は、周作人の「作者は自分の経験や熟知する地方の特徴に基づくべきである」、という作品の真実性を強調する主張をしっかり受け止めて、作家人生において一貫して実践した。このような作品の真実性に対するこだわりは、沈従文が左翼文学思潮を選択しない、という結果をもたらした。この真実性に対するこだわりこそ、沈従文が、自分の経歴や湘西人という排除される「田舎者」の身分を考慮して、軍人、売春婦・童養媳、苗族という排除される三集団を小説に描く対象とした理由である。排除される者に関する作品は、沈従文の作品群の中で人間性が最も輝いているものといえよう。

終章では、序章から第四章までまとめた上で、沈従文が選択した真実性を重視するという主張が70年代中期以降の中国文壇に及ぼした影響についても触れた。80年代中期から出現する「尋根文学」（ルーツを求める文学）は、まさにこの主張を現している。「尋根文学」の文人たちは、地方の特性や民族性を現す文学こそ、理想的な中国文学といえ、このような中国文学にのみ個性があり世界文学に仲間入りできる、という周作人の主張を継承し、中国文学を世界文学のなかに位置づけるよう努力している。沈従文は、まさに最初にこの主張をはっきり理解し、選択して、作家生涯において一貫して実践した作家である。このような選択の結果、沈従文の作品は世界で広く読まれ、語り継がれた。彼のような作品こそ、中国文学を世界に飛躍させたのである。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　楊　霊　琳　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教　授	青 野　繁 治
	副 査　教　授	平 田　恵津子
	副 査　教　授	山 根　総
	副 査　准 教 授	今 泉　秀 人
	副 査　准 教 授	林　初 梅

論文審査の結果の要旨

楊霊琳さんの博士論文「沈従文の選択――沈従文の民国時期の作品における政治性及び文学観」は、従来、政治性に乏しい、あるいは現実逃避的であると見なされてきた沈従文の文学を、作品の舞台となった湘西地域における実際の政治状況と五四・文学革命時期における新文学先駆者、とくに周作人との影響関係を中心として、新しい視点から再評価しようとするものである。

序章から終章まで、全六章からなっている。

「序章　沈従文の生涯及びその評価」では、沈従文の文学的営為を年代を逐ってトレースしながら、各年代における作品とその評価を押さえていく。先行研究の紹介と評価も、その流れの中で行われるため、筆を折って、文学界から離れた1949年以降が、経歴よりも研究対象としての比重が大きくなり、やや錯綜していて、十分に整理されていないような感があるが、先行研究をしっかりと押さえ、次章につながっていく問題点を的確に提示している。

「第一章　沈従文作品における軍人」は、沈従文の作品に数多く登場する軍人イメージが、民衆を愛する軍人を描く時期、民衆を殺戮する軍人を描く時期、両者ともに描く時期に区分されることを述べ、それが沈従文自身の軍人体験と1934年の帰郷における見聞にもとづく変化であること、悪化した軍人イメージに対して、理想的な軍人像を文学で提示するという発想につながる、ということを論じている。軍人形象の変化に着眼した点は、先行研究を発展させて、独自の視点を提示している点で高く評価できるが、「軍人」概念を、沈従文の文脈に即して叙述しているため、中国史全体から見た軍事情勢と軍政という視点が弱いのが、惜しまれる。

「第二章　沈従文の作品における女性解放の問題」では、沈従文作品に現れる売春婦及び童養媳や「女学生」のイメージと蔣光慈、老舎、丁玲など同時代の他の作家の描く売春婦や妾のイメージを比較し、沈従文の描く売春婦は「売春」という職業そのもののなかに、幸福を見出しており、救われる必要などないかのよう」に描かれている、と指摘した。女性解放の問題については、五四時期の魯迅、胡適、周作人の女性解放についての議論と沈従文の発言を比較して、「経済的独立」や「貞操による束縛」よりも、「霊肉一致」と「男女平等」の考えにもとづき、性欲を満たす道具としての地位からの解放をもっとも重視した周作人の考えに近いことを明らかにし、またそれが政治的な主張でもあることを指摘している。女性解放問題は、五四時期以来のメインテーマの一つで、様々な議論が行われてきたところであるが、周作人から沈従文へと同じ考えが受け継がれている、という論点は独創的であり、評価できる。

「第三章　「夢と現実」――沈従文の苗族に関する作品」では、自分自身もその血統を引く苗族について、「完璧で神のような存在」「美しく獅子のように強健」に描く作品がある一方で、漢民族によって、奴隷として売り買いされ、外部からの勢力によって鎮圧され、殺戮されてきた苗族の現実も描いていることを指摘。それは「現実」と「夢」という創作における仕掛けを通して、「社会の欠陥」を浮き彫りにするためであり、「苗族の知られざる素晴らしさと彼らに対する非人間的待遇を明らかにし、苗族に対する差別の撤廃と、理想的な社会の再構築を訴えたの」だと論じている。

「第四章　沈従文の文学観」では、「北京之文藝刊物及作者」という評論を手掛かりに、沈従文が北京の文芸刊行物の編集者に対し、コネによる原稿採用をやめて、「別の階級」(床屋、仕立屋、車夫、兵士)の書いた作品を採用すべきである、とする問題提起をしたのである、と指摘し、それは彼の文学観、すなわち床屋のことは床屋にしか書け

ないし、兵士のことは兵士が一番よく理解している、作家は「自分の経験や熟知する地方の特徴に基づくべきである」という考えの反映であり、彼が軍人、売春婦、苗族などを一貫して描いたのは、その実践である、と指摘した点は、独創性があり、興味深い。しかしある意味で、沈従文が一人苗族を代表するように位置にきてしまったことにより、漢族のインテリから異端視される結果を招いた可能性もあり、そのあたりの経緯についての漢族インテリに即した分析が十分でないように思われる。

また沈従文の「田舎者」意識についても、先行研究の様々な論点を総合し、出身地的要素（湘西出身）と民族的要素（苗族と土家族の血を引く）によって自分自身が受けた差別的扱いをふまえ、排除される存在としての軍人、売春婦、苗族の三集団を作品の描写対象として選択し、「苦痛と不公平な運命を改善しようとしたため」であるとしている。しかしこのような彼の立場は漢族インテリの多くには理解されなかったのではないか。

以上のような文学意識の形成において、周作人の影響が大きかったことを指摘している。周作人から沈従文が受けた影響については、キンクレー、孫歌、小島久代の先行研究があるが、いずれも沈従文の1940年代の評論についてのものであり、文学革命期の周作人の「人的文学」から触発されて「自分の経験や熟知する地方の特徴に基づくべきである」という沈従文の上記文学観が形成され、そのことによって、沈従文は左翼文学の道を選択しなかった、という論点は、独自のものであり、評価できる。

「終章　真実という選択」では、第四章までの論点を振り返り、沈従文の文学観は結局「真実性」の追求であり、それは、五四新文学の中心概念であると同時に、70年代末期の「傷痕文学」80年代の「尋根文学」へと受け継がれていったものである。この「真実性」の選択によって得た「広大な視野」こそが、沈従文作品が世界に認められた理由である、とする。

論文は、全体として、長く中国の左翼文壇によって貶められ批判され、さらに中華人民共和国成立後はほぼ無視されてきた沈従文の人と文学に寄り添い、その文学観を明らかにすることによって、中国大陸における沈従文への政治的評価が、不当なものであったことに異議を唱えている。その論点は、妥当なものであり、独自の視点を導入し、過去の研究者が用いなかった「湖南的西北角」などの独自資料も取り入れ、陳渠珍の湘西地方軍政と、何健指揮下の国民党軍のせめぎあいの中で、沈従文の描いた軍人像を論じた点は、独創的でかつ優れた論点であると評価することができる。また沈従文が周作人の文学観に影響をうけ、左翼文芸の流れに合流しなかった「真実の選択」は周作人への高評価へとつながる点でも非常に興味深く、沈従文文学の背景にこのような政治的主張があった、ということを明らかにした点でも、従来からの沈従文評価を大きく変えるものである。

ただ、沈従文の文学観を明らかにすることに力を注いだ結果、左翼側から批判されることになった沈従文作品の欠点に関する考察が十分にはできていないように思われる。論文の指摘する「夢」と「現実」は、「社会の欠点」を明らかにすると同時に、そのまま沈従文の文学の矛盾点をも示すように見えるからである。さらに日中戦争における対日協力を疑われた周作人へのシンパシーという点でも、左翼的な歴史観からは受け入れ難いものとなっている側面がある。その点をどうクリアするのか、が今後の課題になるものと思われるが、そのことは、決してこの論文の価値を下げるものではない。

よって、本審査担当者は、全員一致で、本論文が博士の学位を授与するのにふさわしい論文である、という結論に達した。